

令和2年7月30日(木)

学びの Safety Net としての授業 ―予習型学習をめぐって③―

松戸市教育長 伊藤純一

いつもの年なら、ふうっと息をつき、一休みができるこの時期ですが、もう一息と意識しなければならぬ状況に戸惑いの毎日を送られていることと思います。本当にお疲れ様です。

三ヶ月にわたる休校中に家庭学習として課された内容について、保護者の皆さんからは「予習はできない」「予習は難しい」という声が届きました。これまでの宿題のイメージは学校で勉強したことの復習が中心でしたから、保護者の皆さんにとっては、宿題が出来るかどうか、学校の勉強について行っているかどうかのバロメーターの一つだったのだらうと思います。ですから予習が宿題になったということ、どう受け止めて良いか不安になった方もいらっしゃると思います。

実は、学校からも同じような声が聞こえてきました。「予習の課題を出すことは難しい」「予習型はできない子どもたちに不利」「できない子どもがいるのになぜ出すのか」などです。加えて「家庭環境の違いがこの休校でより明確になり、しかも格差は広がった。」という声も聞きました。予習型の学習が学力の低位の子どもたちにマイナスの影響を与えてしまう不安を強く抱かれている先生方が多くいらっしゃるようです。

そこで例えばですが、 $\frac{1}{2} + \frac{1}{3} = \square$  という予習を家庭学習として課した時に、 $\frac{2}{5}$  という答を

提出してきた子がいるとします。

普段の学校の授業で、学習課題としてこの問題を出したとしますと、まず3～5分間くらい考えさせて、その反応の中に例に挙げたような誤答があったとしても、正解に導くための反応を中心に子どもたちの思考を整理し、正解を出すための計算方法を全員に理解させる流れを取ると思います。

しかし、予習の課題に対しての子どもたちの反応からどのような授業にするかを考えた時、 $\frac{2}{5}$  という答えを使って、例えば「どのように考えたら $\frac{2}{5}$ になるか」と言うような学習課題で授業を

展開することが出来れば、間違えた子どもたちにとってわからなかったことがわかるようになるヒントを示せる授業になるのでは、と思いますが如何でしょうか。学力の低位の子どもたちに焦点を当てる授業づくりという視点を持っていただきたいのです。間違いには間違いの根拠があります。わからない原因の分析を踏まえた授業づくりに年に何回か取り組んでいただくだけでも学力の向上につながるかと考えます。授業の幅が広がれば、学力の幅に対応できる授業づくりができるのではないだろうかと考えます。子どもたちに「予習では、たくさん間違えてください」という発信をすることが出来れば、多様な学びへの啓発にもなります。

これまでの多くの授業展開では、主体的に考えさせる時間を工夫したとしても、やはり正解を求める方法を学ばせて、知識・理解に重心がかかるものになってしまいます。そしてそれは、子ども主体と言うよりも教員の価値観と視点からの授業になり、学力上位の子どもたち中心の授業になってしまいがちです。今後の想定不能の未来を考えても、予習型を増やすことによって、子どもたちが主体的に課題に向き合う時間が増え、その反応から授業が組み立てられ、主体的、対話的な授業が増えていくことを期待します。

(次は 単元カリキュラムと予習型授業 を予定)